僕が感じた戦争と平和

半田市立半田中学校　２年　杉浦　蒼唯

『身近にある戦争と、初めて訪れた広島』

僕の祖父の兄は、太平洋戦争中にパイロットとして出撃し、グアム島で戦死しました。また、僕はこれまでにウクライナの方々との交流を経験しています。そのため、僕にとって戦争は「昔の出来事」や「遠い国の話」ではなく、常に身近な問題として心にありました。

そんな思いを抱える中で参加した今回の半田市広島平和ツアーは、僕にとって初めての広島訪問となりました。平和記念公園や原爆ドームを自分の目で見て、これまで以上に平和について深く考える機会となりました。

『僕たちに渡された「戦争」の記憶』

現地では、平和記念公園内の見学や原爆ドームを間近で見学し、当時の被害の大きさに言葉を失いました。

特に心に残っているのは、被爆体験をされたお話です。語り部さんは、「一瞬にして日常や大切な人の命が奪われたこと」「生き残った後も苦しみが続いたこと」「今も自分の健康状態と戦争との因果関係に苦しんでいること」を静かに、しかし力強く語ってくださいました。教科書やニュースだけでは伝わらない当時のリアルな痛みや悲しみが、言葉一つひとつから直接心に響いてきました。

『僕たちにできること』～平和のバトン～

広島の復興のシンボルと言える路面電車に乗って、原爆ドームに向かいました。そこで僕たちは、半田市民の皆さんが平和への願いを込めて折ってくださった鶴を広島の地に届ける大切な役目を果たしました。原爆ドームの前でその折り鶴を捧げた時、戦争によって一瞬で奪われた多くの命と残された人々の消えない痛みを思い、胸が強く締め付けられました。絶対に忘れてはならない歴史と平和の尊さを、身をもって実感しました。自分のルーツにある戦争のこと、世界で今も起きている紛争、そして広島で学んだ悲劇は、すべて「平和をどう守るか」という一つの問いにつながっています。

また、語り部さんのお話を聞き、戦争の悲惨さは言葉に尽くせないほど重く、決して風化させてはならないものだと強く感じました。親戚が戦死した過去やウクライナの方との交流、広島で目にした歴史に向き合う中で、僕たちの世代が「平和のバトン」を受け取る番なのだと覚悟ができました。

中学生の僕にできること。それは、広島で見て、聞いて、感じた記憶を、家族や友達など一人でも多くの人に伝え続けていくことです。記憶を風化させず、過去から学び続けることが未来の平和につながると信じています。語り部さんたちから託された思いを胸に、半田の未来を担う一員として、平和の大切さを次の世代へとしっかり語り継いでいきます。